

儀礼で呼ばれる祖先たち

台湾アミ族シカワサイ儀礼の場合

Ancestors Invoked by Rituals: The Case of the *Si-kawas-ay*
Rituals of the Amis Tribe in Taiwan

原 英子

はじめに

- ①アミ族シカワサイ諸儀礼における祖先
- ②シカワサイ儀礼における儀礼依頼者と祖先の関係
- ③位牌祭祀とシカワサイが呼ぶ祖先

まとめ

【論文要旨】

日本統治時代、台湾先住民族に対する宗教政策において、彼らが「祖先崇拜」をするという点が日本人との共通性として強調された時期があった。しかし当時は一部の人類学的な調査を除いて、台湾先住民族の祖先崇拜に注目しても、具体的に個々の民族の祖先がどの範囲を指すのかという点について、詳細な調査はほとんどなされなかった。本稿では台湾先住民族のひとつ、アミ族の宗教儀礼をとおして、祖先の範囲を明らかにすることを目的とする。

アミ族の親族論では、その氏族制と母系制が注目されてきた。特にアミ族は母系制かという点が論議の対象となってきた。そうした中、本稿で取り上げる南勢アミは、その両点が明確にみられないという点から、戦後の一時期を除いて人類学的調査があまりおこなわれなかった地域である。また、かつてアミ族村落に広く存在していたが、現在ほとんどなくなってしまったシカワサイと呼ばれる宗教的職能者が、一部の村落ではあるが、現在も活動がみられる地域でもある。本稿ではこうした地域的、对象的に収集資料が少ない宗教的な側面からアミ族の祖先の範囲を提示し、アミ族の祖先について考えていく。具体的には、まず個性ある死者と祖先との時間的な推移について取り上げ、次に儀礼依頼者と儀礼で呼ばれる祖先の関係について明らかにする。またアミ族では現在、漢人式の祭壇や位牌を設定する者が増えているが、その際、漢人的な位牌の受容とアミ族的な祖先の関係にも注目する。以上のことをとおして、アミ族の祖先に関する資料提示することで、今後のアミ族親族論の発展のための基礎的な作業をおこなう。

キーワード：アミ族、シカワサイ、祖先崇拜、カタボ、ロマ

はじめに

中国とその周辺地域における研究では、中華文明を理想型とし、積極的な取り組みをおこないながらも、土着の文化の枠組みと結合させてきた各地域社会側からの視点や、周辺と中心とのダイナミズムな相互作用が注目されている[三尾 1999:1-2]。本稿でも、こうした視点にたつて、台湾先住系民族のひとつ、アミ族でシカワサイと呼ばれる宗教的職能者が儀礼の際、呼ぶ死者に注目し、彼らがいかに漢人的な文化要素を取り入れながら、アミ族的な祖先祭祀と結合させているのかについてみていく。中国周辺の少数民族が漢人的な文化要素を自文化の枠組みにとりいれながらも、民族的なアイデンティティを維持している様相については、これまでも種々の研究がなされてきた。台湾先住系民族についても、末成道男がブユマ族の位牌や治療儀礼におけるブユマ族的な観念と漢文化のかかわりを[末成 1983 a, 1983 b]、また清水純がクヴァラン族の位牌祭祀の受容と祖先との関係について論じている[清水 1991]。これらはいずれも、台湾において漢文化の先住系民族文化への影響は大きく、漢文化の積極的な取り組みをおこないながらも民族的な観念が存続されていることを指摘している。こうしたことを踏まえ、本稿では、アミ族のシカワサイ儀礼において呼ばれる祖先に注目しながら、アミ族における祖先とは何かを明らかにしていきたい。

なお、本稿でのアミ語表記は、Louis Pourrias, Maurice Poinot[1996]、方[1986]にしたがった。表記方法統一のため、引用文献中のアミ語については、この表記方法にしたがって書きなおしている。

①……………アミ族シカワサイ諸儀礼における祖先

台湾アミ族には、シカワサイ *si-kawas-ay* といわれる宗教的職能者がいる。シカワサイはアミ語でカワス *kawas* と呼ばれる神、死者の魂、祖先、怪物など超自然的存在と関わるのできる能力をもつとされている。アミ族において、カワス世界は、現在我々が住んでいる世界の周縁に存在し、その中で、個々のカワスは、きまった方位に存在していると考えられている。祖先は東にいるとされている。アミ族のシカワサイは、種々の儀礼で、儀礼依頼者と関係があると認める「祖先」を呼ぶ。祖先はアミ語で、トアス *to'as*、あるいはガガサワン *gagasawan* と呼ばれている。シカワサイ儀礼でトアスといった場合、自分が生まれる以前に生まれた者という時間に重点が置かれ、ガガサワンといった場合、起源を同じくするという親族意識を共有し、一族としてのつながりに重点が置かれているが、必ずしも具体的に系譜関係をたどれないものである。ガガサワンは地域によってはガサウ *gasao*、カカオサン *kakaosan*、ラルガワン *rarogawan* などともよばれ、従来一般に、「氏族」と訳されてきた[台北帝国大学土俗人種学研究室 1935:393, 古野 1945:214]。シカワサイ儀礼では、唱え事のなかで、ガガサワンという言葉が、トアス(祖先)という意味で使用されるが、祖先への呼びかけとしてはトアスは使用されない。これまでのアミ族の親族研究では、アミ族が母系か否かという議論が多くなされてきた。その際、婿入した男性は、婚家の祖先とはならず、埋葬などが生家でなされ、生家の祖先となるとされてきた。このことに対する反論は現在までのところ

特にはなされていない。ところが筆者の調査した南勢アミは、そのような例をきかず、婚入者は婚家で埋葬され、その後、シカワサイ儀礼でも婚家の祖先とともに呼ばれている。従来南勢アミは、その他の地域のアミ族と親族組織などの面で異なることが指摘されてきた。そうした南勢アミにおいて、祖先とはどのような者なのか、シカワサイ儀礼で呼ばれる祖先を検討していきたい。

(1) 個性ある死者から祖先へ

特定の死者に対する儀礼

人が死亡すると、シカワサイは死者の魂を祖先のもとに送り出すミツクル *mi-ckor* といわれる儀礼をおこなう。ミツクル儀礼の翌日、死者へ豚をささげるパバブイ *pa-vavoy* 儀礼をおこなう。人は死後、祖先たちのいるカカラヤン *kakalay-an* とかタトアサン *ta-to'as-an* と呼ばれるところに行くとされているが、その入口には門があり、生者からの贈り物である豚を携えて行かないとその門をあけてもらえないとされているからである。死んで間もない者は、自分が死んだことがよくわからず、まちがって生前の家にもどることがあるという。しかし死者は1ヶ月をすぎると、急速に生前のことを忘れてしまい、そうしたこともなくなるという。それでもなお帰ってくる場合は、葬儀に不備があったり、何か伝えたいことがある場合だという。そのため、死後1ヶ月は、死者を出した家や分家した子どもたちは、それぞれ自分の家にシカワサイを呼び、パナノム *pa-nanom* 儀礼をおこなってもらう。パナノムは死者の魂をカカラヤンから呼び出し、供物を与える儀礼である。

死後四十日くらいまでは、死者の写真を家に飾り、朝昼晩の3回食事を与え、洗面道具を写真のそばにおいておく。死後四十日目にはこれらをかたずけるため、シカワサイにパツァカット *pa-cakat* という儀礼をおこなってもらう。

死後、四十日目、百日目、一年目を目安に、死者に豚を捧げるパバブイがおこなわれる。それぞれ四十日祭 *sopat a polo' a romiad*、百日祭 *cacay a patekenan a romiad*、一年祭 *cacay a mihca* と呼ばれる。

1年をすぎると、パナノムは、年に1~3回くらいになる。村(ニヤロ *niyaro*)の行事が開催される前におこなう者、5月と11月の稲の収穫儀礼のときおこなう者などがある。だいたい死後4~8年くらい続けられる⁽⁴⁾。死後、十年目には十年祭 *mo'tep a mihca* をおこない、多くの場合、これで



写真1 ミツクルで死者の魂を呼ぶミカワサイ



写真2 ミツクルで死者の魂を祖先のもとへ送る前に供物を与えるミカワサイ



写真3 パカン・ト・カワス

特定個人⁽⁵⁾に対する祭祀は最後となる。

多くの祖先とともに名を呼ばれる祖先

シカワサイ儀礼では、儀礼開始にあたって、かならずその儀礼に関わるとされる神々(カワス)と、儀礼依頼者に関わる祖先の名が呼ばれる。それは、祖先に対して食物を与える儀礼パカン・ト・カワス *pa-kaen to kawas*、家を新築・改築・増築するときにおこなう儀礼ミアシク・ト・ロマ、稲の収穫儀礼ミアナン *mi-a'nan*、粟の収穫準備儀礼ミテワイ *mi-tiway* 等である。ここでは複数の祖先名がシカワサイによって呼びあげられ、供物が捧げられる。

(2) 時間との関わり

シカワサイ儀礼では、特定個人に対する祭祀が死後4~8年の間おこなわれる。しかし、一般に死後10年目におこなわれる十年祭を最後に特定個人を呼んで

の祭祀はおこなわれなくなる。その後は複数の祖先とともに名前が呼ばれる存在となる。呼ばれる名前は、世代深度としては、2~3代である。それ以前の祖先については、実際に名前を呼ばれなくても、名前を呼んだ祖先たちがいっしょに連れてくるとされている。

特定個人への祭祀で例外として、幼少期に他界した者に対しては、死後、十年以上経っても個人的に呼ばれて祭祀される。筆者が調査した例では、30数年前に4歳で死亡した娘のパナノムをおこなっている者がいた。また同一の家で1985年と93年に12歳と9歳で死亡した息子と娘のパナノムはおこなうが、84年に82歳で他界した母にはおこなわない例がみられた。このように幼少期に死亡した場合と高齢で死亡した場合は、その扱いに違いがみられる。海岸アミを調査した馬淵悟も、結婚適齢年齢以上で死亡することが望まれ、若くして死亡すると祖霊に数える例がほとんどないことを指摘している[馬淵 1981:162]。この点、南勢アミも、海岸アミと同様である。

②……………シカワサイ儀礼における儀礼依頼者と祖先の関係

(1) カダボ

アミ語でカダボ *kadavo'* は、婚入者を意味し、男性に対しても女性に対しても使われる。⁽⁶⁾カダボについて、従来の研究では、次のことが指摘されてきた。カダボは婚家のロマ *loma'* の成員である一方、潜在的に生家のロマの成員でもある[中島 1983:382]。ロマとは、家と訳されるが、本来「家屋」の意味がある。生計を共にする居住単位であり、また祖先を祀る祭祀単位でもある[末成 1983c:105]。カダボは重病になると、生家にもどされ、死亡すると生家で埋葬される[馬淵 1976:15, 末成 1983c:120-121, 中島 1983:382]。そこでカダボは、生家の祖霊となり、決して婚家の祖霊とはなり得ない[馬淵 1980:41]という。かつては妻方居住婚が盛んであったアミ族において、カ

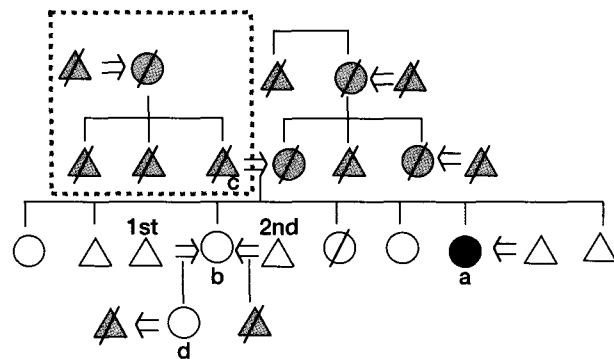
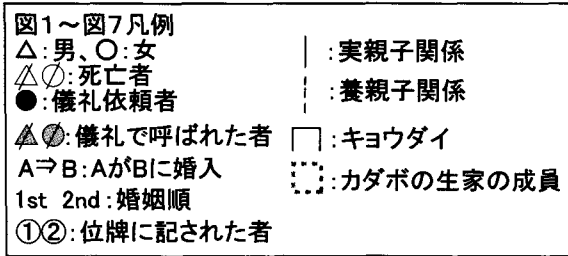


図 1

ダボといわれる婚入者がシカワサイ儀礼でどのようにあつかわれているのかについてみていく。

【事例1】 調査日：1996年2月29日 儀礼名称：ミアシク・ト・ロマ

aの家の新築儀礼，ミアシク・ト・ロマ *mi-asik to loma'* におけるミブテク *mi-vtik*（儀礼開始前に，祖先たちによびかける唱え事）のとき，シカワサイが呼んだ死者たちを図1に示している。aの夫がカダボである。aは分家している。本家はbである。

末成によると，アミ族には，マリナアイと呼ばれる本家と分家より成る永続的集団がある[末成 1983c:155]。マリナアイは，筆者の調査した南勢アミでは一般にラロマアン *la-loma'an* と呼ばれている。末成は，マリナアイとラロマアンは，同意語であるが，ラロマアンの方が比較的近親関係のあるロマのつながりを指す傾向にあるという[末成 1983c:271]。マリナアイとは，本支関係をもったロマよりなる外婚集団である[末成 1983c:156]。また，現在同居しているか否か，或いは家系を共にしているか否かに拘らず構成され，ロマでの出世者を結ぶ系譜的範囲という意味を含み，これに対して末成は「系譜マリナアイ」と呼んでいる[末成 1983c:156]。その他，マリナアイには婚出者の子孫ミトアサイを加えることがあるし，広義のマリナアイとしてカダボは含まれるが，婚出して共に生活をしていない母方オジであるバケは除かれることを指摘している[末成 1983c:157]。

シカワサイが呼んだ祖先には，系譜的マリナアイに，広義のマリナアイとして含まれるカダボのほか，母方オジであるバケ *vaki*，婚出した娘の夫もよばれている。また儀礼依頼者の親に関しては，カダボである父cだけでなく，父の生家のカダボを含んだマリナアイも含まれている。

【事例2】 調査日：1995年12月11日 儀礼名称：ミアナン

稲は年に2回，5月ごろと11月ごろ収穫される。稲が収穫されると各戸ではシカワサイを呼び，稲の収穫祭ミアナン *mi-an'an* を行なってもらう。中島が，ロマが祖先や穀物と結びついていることを指摘している[中島 1983:391]ように，ミアナンのとき，シカワサイは，裁

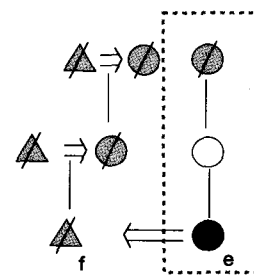


図 2

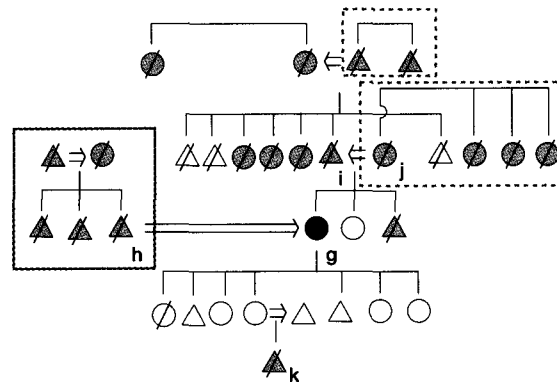


図 3

培植物に関わる諸カワスとともに祖先を歌で呼ぶ。そのとき呼ばれた祖先を図2に示した。

儀礼依頼者 e は、f の家に婚入したカダボである。f は、1984 年に死亡している。ミアナンで呼ばれたのは、儀礼を開催している e の婚家のロマの成員である f、f の母、f の母の母の他、f のロマのカダボである f の父と f の母の父が呼ばれている。また e の生家の母の母も呼ばれている。

【事例3】 調査日：1995年12月29日 儀礼名称：ミテワイ

現在、粟の栽培は行なわれていないが、粟の播種準備儀礼ミテワイ *mi-tiway* は、続けられている。12月末の夜中から次の日の昼近くまでかかっておこなわれる。祖先たちは、この日の夜、子孫のもとに帰ってくるものとされている。シカワサイたちは、村の一軒一軒すべてを訪ね、各家で歌を歌いながら粟の神とともに祖先たちを呼んで祭祀する。ただし、キリスト教の信者のなかには、この儀礼を拒否する者もいる。儀礼依頼者 g の家のミテワイで呼ばれた祖先を、図3に示した。ミテワイではまずカダボである g の夫 h の父・母・兄二人が呼ばれた。h の父は、h の生家に婚入してきたカダボであるが呼ばれている。その後で、g の父 i の母と、カダボである g の母 j、それに g の父 i のキョウダイのなかで女性だけが呼ばれた。その次に、婚出後死亡した g の弟、カダボである j の女性キョウダイ3人が呼ばれた。最後に、婚出した g の娘の息子 k、g のロマのカダボであった父 i の父の弟、父 i の母の姉が呼ばれた。g の娘は婚出し40過ぎで亡くなったというが、この時は呼ばれていない。また、g の娘の息子 k は結婚前に死亡し、調査時、死後1年を経えていなかった。

事例3では、儀礼を依頼した g の広義のマリナアイだけでなく、カダボである h と j の生家のキョウダイや親、ならびにカダボの生家に婚入してきたカダボも呼ばれている。

以上事例1, 2, 3から、アミ族のシカワサイ儀礼では、カダボが祖先の一人として呼ばれているのがみられる。また、儀礼依頼者の父などがカダボとして婚入している場合や儀礼依頼者自身がカダボの場合、彼らの生家へ婚入してきたカダボを含んだロマの成員が呼ばれているのがみられる。

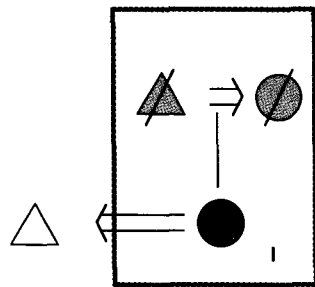


図 4

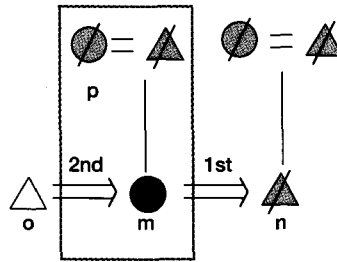


図 5

以上の例では、儀礼を開催しているロマを中心に、そこに婚入してきたカダボとその生家の祖先を祭祀することがみられた。それだけではなく、カダボが婚家で生家の祖先を祭祀することもある。それを以下にみていく。

【事例4】 調査日 1995年4月3日 儀礼名称：パナノム

1はカダボである。1の父は1992年に死亡した。この日1は、父の祭祀であるパナノムを婚家でおこなった。パナノムは、ふつう死後4～8年間おこなわれる。1の母は十年くらい前に亡くなったのでパナノムの期間をすぎているが、1のキョウダイは皆キリスト教信者で、父母の祭祀をしたことがないとの理由から、この日は、父にパナノムをすると同時に、母にもパナノムをした。

【事例5】 調査日：1995年12月14日 儀礼名称：パナノム

アミ族では住居を新築・改築・増築する際、あるいは家に植えてある樹木を切る場合など、住居や庭の現状を変えるとき、住居を建てた祖先や、住居を建てようとする土地を所有していた祖先をシカワサイに呼んでもらい、そうしたことをおこなってよいかうかがいをたてる。儀礼依頼者であるmは他村からnのロマに嫁入りしてきた。mの1番目の夫nは、死後7～8年である。その後現在の夫oが隣村から婚入してきた。現在、mは1番目の夫nの住居で、nとの間の子どもたちと、2番目の夫oとoとの間の子どもたちといっしょに暮らしている。mの母pは1994年に亡くなった。この日は、現在の住居を改築しようと思い、pのパナノムをおこない、同時に、pが暮らす住居を建てたnの父と母に家を改築してよいかどうかをシカワサイに聞いてもらっている。nの父は15年ほど前に、母は20年ほど前に亡くなっている。このとき呼ばれた死者たちを図5に示した。

事例4で、カダボである1の父母は、1の婚家のロマの成員ではないが、1は婚家で生家の父母の祭祀をおこなっている。また、事例5でmは現在の住居を改築するために、mが暮らす現在の住居を建てた1番目の夫の祖先を直接祭祀するのではなく、mの住居とは直接的にかかわらない生家の母pのパナノムをおこなうことで、婚家の住居を建てたnの父母にうかがいをたてている。これはパナノム儀礼が、儀礼依頼者と血縁関係がある者に対しておこなうのがふつうで、まれにイトコなど、同じマリナアイの者がおこなうことと関係していると思われる。つまりパナノムでは

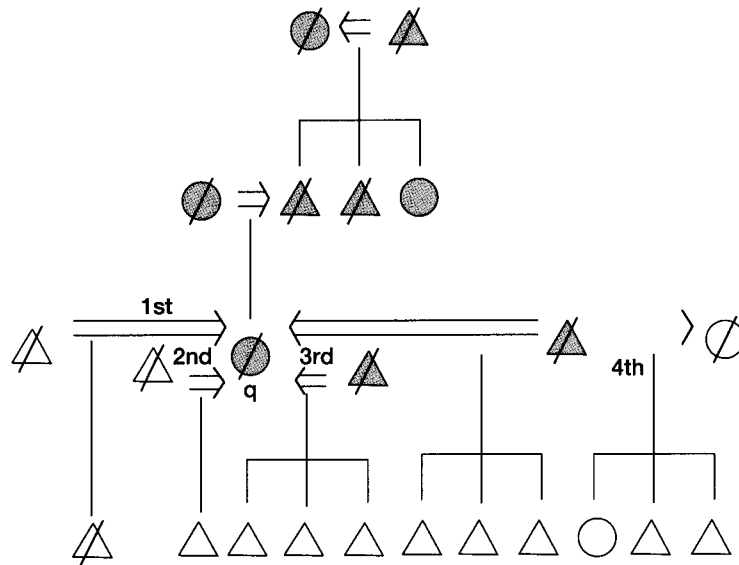


図 6

カダボが婚家で、夫の父・母などを祭祀する例は、筆者の調査ではみななかった。mの家には、現在の住居を建てた1番目の夫の子どもがいるが、小学生と中学生である。そのためか、1番目の夫の子は儀礼依頼者とはならず、改築のうかがいをたてるのに、カダボが生家の祖先を呼び、その際に現在の住居を建てた祖先を呼ぶという複雑な手続きがとられている。このパナノムでは、住居建築にかかわりのない現在の夫oの祖先は誰も呼ばれていない。

事例4、5により、カダボは婚家で、生家の祖先を祭祀することができることがわかる。その際、事例5に示されるように、儀礼依頼者の生家の祖先を祭祀しながら、儀礼を開催しているロマの祖先にうかがいをたてるということもおこなわれている。これまでの事例で、シカワサイが儀礼で呼ぶ祖先には、カダボが含まれていることが確認できたが、アミ族では、複数回結婚する者が少ない。その場合、シカワサイはこれをどのようにあつかっているのであろうか。これについて以下にみていく。

【事例6】 調査日：1995年11月12日、13日 儀礼名称：葬儀のパパバイとパナノム

アミ族では1度婚姻関係を結ぶと、現在は婚姻関係がなくても、そうした者とは関係が切れないと考えられている。図6では、4度結婚したqの葬儀のパナノムとパパバイのときにシカワサイに呼ばれた死者を示している。図6をみると、qの4度の結婚のうち、1番目の夫と2番目の夫は呼ばれず、3番目の夫と4番目の夫だけが呼ばれているのがみられる。儀礼を主宰したシカワサイによると、本来は1番目の夫、および2番目の夫も呼ぶべきであるが、カトリック信者だったから呼んでいないのだという。

ここでは儀礼依頼者ではなく、葬儀をしている儀礼対象者を中心とした人々が呼ばれている。一

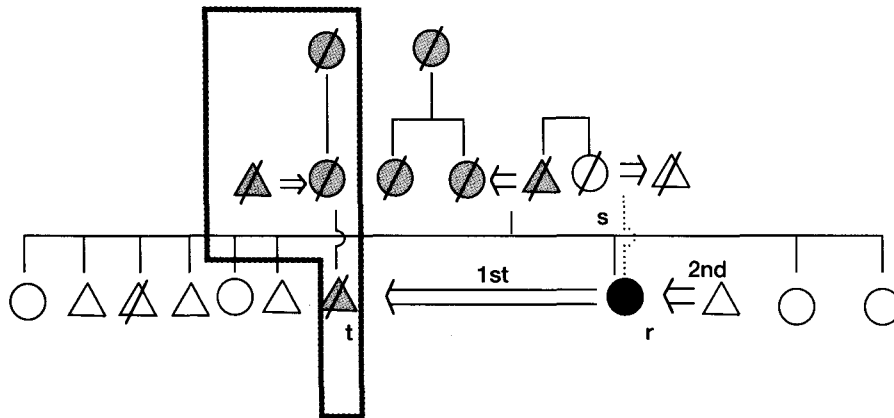


図 7

度結婚すると、離婚しても関係が切れないとされているのにみるように、儀礼対象となっている者がかつて結婚した者は、カトリック信者以外すべて呼ばれた。

(2) 養父母

アミ族では、ロマの継承者がいない場合、養子がおこなわれる。末成によると、養子はマリニナイから選ばれ、適当な子がない場合、婚出者の子を選ぶ[末成 1983c: 113]。

中島によると、特に家長の姉妹の子が望ましいとされ、実の親子であっても、一度分家した成員は、改めて養子の形で再統合されるという[中島 1983: 384]。養子がシカワサイに儀礼を依頼した場合、どのような人々が祖先として呼ばれるのかについて、次にみていく。

【事例7】 調査日：1995年12月5日 儀礼名称：ミアナン

rは幼いころ、父の妹sの家に養入した。sは、他村に婚出していたので、rも幼いころ他村で暮らした。その後rは、実父母のいる村にもどりtと結婚し、tのロマに婚入した。tの死後、現在の夫が婚入して来た。シカワサイの稲の収穫儀礼ミアナンで呼ばれた者を図7に示した。呼ばれたのは、rの実父母と、実母の姉、実母の母である。養父母は呼ばれていない。その他、rの1番目の夫tの母とtの母の母、それにtの父が具体的に名前が呼ばれた。それに、tの母の祖先（ガガサワン *gagasawan*）という言い方で呼ばれた。tの父はカダボであるため、tの母のロマの祖先が呼ばれたのである。この他、rによるとtの父の父と思われる者が具体的な名前が呼ばれたが、関係がはっきりしない者が1人いる。現在の夫である2番目の夫の祖先は呼ばれていない。

事例7では、カダボであるrの実父母は呼ばれたものの、養父母は呼ばれていない。養子の例が少ないため、この事例だけで断定するのは避けたいが、事例7の場合、rの養父母よりも、rの婚家の祖先が重視されているといえる。

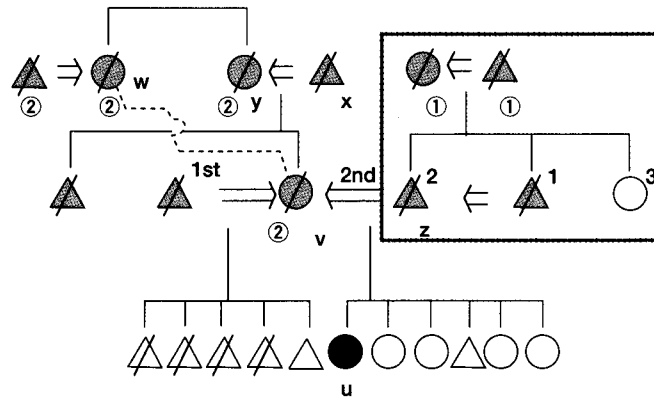


図 8

③……………位牌祭祀とシカワサイが呼ぶ祖先

台湾が国民党政権になった後、台湾先住民の間ではキリスト教が急激に布教された。現在のアミ族もキリスト教徒になっている者が多いが、キリスト教に入信していない者の中には、漢人式の位牌を設置する家も増加している。A村では、1980年代以降、A村出身の者が漢人のシャーマンとなる者が現れており、そうした童乩の指導で位牌を設置したという家がある。あるいは、台北などの都会にでた時に商売をし、そこで漢人式の祭壇を買って漢人神を祭祀するようになり、その後、村にもどってからも漢人式の祭祀を続けている者がいる。そうした者のなかに、漢人式の位牌をもつようになった者もいる。

しかし位牌に含まれる名前は、漢人式の単系だけでなく、婚入者の祖先も含まれており、漢人との違いがみられる。位牌を導入しながらも、シカワサイに儀礼を依頼することを持続している場合も多く、そうした場合、位牌に書いてある祖先名とシカワサイが呼ぶ祖先に食い違いがみられることがあった。これらが示していることは、漢人とアミ族の祖先に対する観念が違うということだけでなく、一般に、アミ族の人が位牌に書かなければならないと思う祖先とシカワサイが儀礼で呼ばなければならないと思う祖先が違っているということである。

【事例8】 調査日：1995年12月14日 儀礼名称：バナノム

図8の儀礼依頼者uの妹は、漢人式のシャーマンである童乩となった。妹の童乩の師匠が指導して位牌をつくった。位牌には「癸酉年」と書いてあるところから、1993年につくったと思われる。uの母は、その実母yの姉wの養子であった。uはシカワサイに実母vと実父zに対して、バナノムを依頼した。ミブテクで呼んだ者を図8に示した。

事例7では養父母が呼ばれていなかったが、ここでは養父母ならびに実父母が呼ばれているのがみられる。この違いは、事例8の場合、養子であるvが、ロマを継承し、そこに夫が婚入しているが、事例7の場合、養子に行ったrは、その後養子先のロマを継承せずに、tのロマのカダボと

なっていることによると思われる。その他、儀礼依頼者 u の 1 番目と 2 番目の夫、ならびにパナノムの対象である z の父・母とキョウダイ、同じくパナノムの対象である u の母のキョウダイが呼ばれている。

位牌は、南向きに置かれた祭壇の西隅に、東西方向に 2 つ、並べて置いてある。位牌には、図 8 に①②で示した者の名前が記されているという。東側においてある位牌を①、西側においてある位牌を②として記した。これをみると、位牌に書かれている者とシカワサイが儀礼で呼んだ名前の範囲が違っているのがわかる。u の母、母の実母、母の養母といった u のロマの成員が西側②の位牌に記されている。カダボについては、記されていない者が多いが、例外として v の養父が、w といっしょに記され、②の位牌のなかにあるという。シカワサイ儀礼で呼ばれたカダボ v の 1 番目の夫と 2 番目の夫、およびそ彼らのキョウダイたちは位牌には、いれられていないという。儀礼依頼者 u からみて、u のロマを中心とした祖先たちは②の位牌に、カダボである父の生家の祖先たちは①に入れられている。

事例 8 では、漢人的な位牌祭祀が導入された場合でも、位牌に書かれる名前が、漢人的な単系ではないことが示されている。位牌を、婚入者である父方の祖先と母方の祖先を分け、そこには父方・母方の祖先の位牌ともに、婚入者が含まれている。しかも、その位牌に記されている名前とかかわりなく、シカワサイたちはシカワサイ儀礼でよぶべき祖先を選択している。筆者が調査したアミ族村落では、位牌祭祀が 1980 年代後半くらいから、徐々に増加しつつある。設置されて間もないものが多く、それらの管理が、誰にどのように継承されるのか、分家のときはどうするのか等については今後の経過をまたなければならない。また、日本統治時代に位牌をもっていたという家が確認されたが、戦後普及したキリスト教に入信したときに捨てたといひ、どのような位牌がどのように祭祀されていたのか、現在のところよくわかっていない。

まとめ

シカワサイ儀礼では、儀礼で祖先を呼ぶことが行なわれる。アミ語でトアス、ガガサワンと呼ばれている。本稿で明らかになったことを以下にまとめていく。

まず、祖先の個性と時間の関わりについてである。人が死ぬと、死後 1 年の間は頻繁に個別の祭祀が行なわれる。しかしその後、徐々に祭祀回数が減少し、普通十年を境に、個別には祭祀されなくなる。その後は、他の祖先とともに家での儀礼の際、名を呼ばれて祭祀される存在になり、やがて名も呼ばれなくなるが、名を呼ばれた祖先とともに祭祀されるという。しかし、結婚適齢期以前に死亡した場合、こうした祖先化の過程をたどらず、いつまでも個性ある死者として祭祀される。

シカワサイ儀礼では、儀礼依頼者、あるいは葬儀の場合は儀礼対象者を中心として、その祖先が呼ばれる。祖先とは、①儀礼依頼者のカダボやバケを含んだマリニナイである。②特に儀礼依頼者の親に対しては、カダボであっても、その生家のカダボを含んだマリニナイが呼ばれる。③婚出した者も祖先として呼ばれる。また、儀礼依頼者がカダボである場合、カダボは婚家で生家の親などを祭祀することができる。その際、儀礼を主催している婚家の祖先も呼ぶことができる。複数

回結婚した者は、一度結婚したという関係は、離婚したり、離婚後死亡しても切れない。複数回結婚した者を祭祀対象として呼び出すとき、生前一度でも婚姻関係を結んだ者は、祖先のひとりとして呼ばれる。養父母については、シカワサイ儀礼では、特に呼ばなければならない祖先としては重視されていない。

位牌祭祀については、位牌に記されている名前が漢人的な位牌と異なる場合がみられる。これは位牌祭祀にアミ族的な祖先観が影響していると考えられるが、そうした位牌に記された名前も、シカワサイ儀礼で呼ばれる祖先とは異なっている場合がみられる。

これまでアミ族研究でカダボは生家の祖先となり、婚家の祖先にならないとされてきたが、南勢アミではカダボもシカワサイ儀礼で祖先としてよばれているのがわかった。本稿でみてきた事例は、南勢アミのシカワサイ儀礼を資料としている。従来、南勢アミは、その他の地域のアミ族と比べ、親族組織の面で顕著な差がみられることが指摘されてきた[末成 1983c:14]。南勢アミの調査は、他地域のアミ族と比べると資料が少ない。こうした理由から、ここでみてきたシカワサイ儀礼におけるカダボの取り扱い、養父母の取り扱いについては、南勢アミの特徴なのか、それとも今日的な婚姻形態の変化による結果なのか、あるいはシカワサイ儀礼という宗教儀礼であるためなのか、判断が付き難い面がある。今後の資料の収集によって、こうした点が解明されていかなければならないと思う。

追記

1895年から1945年までの半世紀の間、日本は台湾を植民地支配していた。その間、寺廟整理や海外神社の建設にみるように、日本が台湾の人々の宗教に、政策的に干渉しようとしていたことがみられる。台湾先住民族はもともと文字をもたなかった民族であり、日本統治時代の日本の政策に対して彼らの側からの文字資料は非常に限られている。そうしたこともあり、日本統治時代に、日本の政策が台湾先住系民族の人々のいかなる影響を与えたのか、先住系民族の側からの動向を知ることには困難がともなっている。

日本統治時代、台湾の先住系民族に対する宗教政策は、1930年代になると、彼らが「祖先崇拜」をしていくということから日本人との共通性が強調され、精神的指導が重視されていく。たとえば、台湾各地に派遣された警察の駐在員などを主な読者とした1933年の『理蕃の友』には、「宗教による善導は実に精神教育の最大骨子」(『理蕃の友』昭和八年二月一日)と掲げた文章がある。また、1934年の台湾総督府警務局『蕃人教育概況』では、「宗教的指導」という題の項目をたて、台湾先住民族は「靈魂の不滅を信じ人は死するも其の魂魄は永く現世に留まつて、子孫の行為を照覧するものとなし、彼等の日常生活は殆ど之に依つて律せらるといふも過言でない。斯くの如く蕃人は祖靈を崇敬し宗教心の心極めて厚」いものだという記事がみられる[台湾総督府警務局 1934:10]。この文章は、日本人と同じように祖先祭祀をするものの、台湾先住民族の祖先祭祀は、まだ未発達ゆえに、日本の神道を中心とした宗教で「教化撫育」しなければならないという結論で締めくくられている[台湾総督府警務局 1934:10]。日本と台湾先住系民族との支配—被支配の関係は、山路勝彦が指摘しているように、時には親と子のレトリックを使って、教化撫育すべき「子」とし

での台湾先住系民族と、それを指導すべき「親」としての日本という関係で表されている[山路 1991, 1994]。この親と子のレトリックは、台湾の先住系民族に対する宗教政策においても、日本人によって「教化」「善導」されねばならない台湾先住系民族の宗教という構図で表されている。こうした政策は、「祖先」を崇拝するという行為において、日本との類似が強調されており、彼らの「祖先」とは、日本人の考える「祖先」といかに違うかという視点は欠如している。そうした欠如の視点をおぎなう意味で、本稿を記した。

注

- (1)——魂はアミ語でアディオ *'adigo* のこと。影という意味をもつ。人のアディオは、指先より小さいが生前のその人と同じ姿をしているとされる。人だけでなく、物質にもアディオがあるとされている。
- (2)——本論では、筆者が調査した南勢アミできかれる方位について記している。アミ族は台湾東部に南北に細長い地域に居住しており、地域によって、祖先がいるとされる方位が異なる場合がある。
- (3)——これまで報告されてきたアミ族のガガサワンは、地域によってはガサウ *gasao* とも称される。ガサオについては、起源をおなじくするという親族意識を共有し、結婚によって所属が変更されることもない[中島 1983: 383]とされてきたが、筆者が調査した南勢アミでは、結婚すると、婚家に所属が変更されるとされている(中島の表記では *ngasao* であるが、ここでは、本稿の表記にしたがった)。
- (4)——後述しているが、幼少期に亡くなった者に対しては、死後四十年以上も経っているのにバナノムを続けている例がみられた。
- (5)——ただし、病気や不幸の原因が、シカワサイによってある特定の故人に限定された場合や本稿の事例 4、事例 5 などの場合、死後十年以上経っている場合でも、その故人に対して供物をささげるバナノムがおこなわれることがある。
- (6)——未成は、カダボに「ヨウシ」の意味があることを指摘している[未成 1983c: 330]。筆者が調査した南勢アミでは、養子はミサ・ワワ *misa-wawa* と呼ばれ、婚入者をカダボと呼んでいたので、以下、カダボについては、婚入者のことを指すことにする。
- (7)——この時行なわれたミテワイでは、g の娘は呼ばれなかったが、この数日後に g の依頼でおこなわれたミアシク・ト・ロマでは呼ばれている。

引用文献

- 清水 純 1991 「漢化のメカニズム—クヴァラン族の事例から—」(『国立民族学博物館研究報告別冊』14 国立民族学博物館)
- 末成道男 1983 a 「台湾ブヌマ族の治療儀礼にみられる志向性—ピンロウジから線香へ—」(江淵一公・伊藤重人編 吉田禎吾教授還暦記念論文集『儀礼と象徴—文化人類学的考察—』九州大学出版会 383-413)
- 1983 b 「ブヌマ族の位牌祭祀」(『聖心女子大学論叢』61) 105-141
- 1983 c 「台湾アミ族野社会組織と変化—ムコ入り婚からヨメ入り婚へ—」東京大学出版会: 365 pp.
- 台北帝国大学土俗人種学研究室 1935 「台湾高砂族系統所属の研究」
- 台湾総督府警務局 1934 「蕃人教育概況」
- 中島星子 1983 「台湾海岸アミ族の *romah* (家) 関係—婚姻事例より—」『民族学研究』47-4 382-391
- 古野清人 1945 『高砂族の祭儀生活』(南天書局復刻版 1996)
- 馬淵 悟 1976 「台湾海岸'Ami 族調査報告」(I)『歴史と構造—文化人類学的研究—』6 (南山大学大学院文化人類学研究室): 11-32
- 1980 「台湾海岸'Ami 族調査報告」(VI)『歴史と構造—文化人類学的研究—』8 (南山大学大学院文化人類学研究室): 39-46
- 1981 「台湾海岸アミの祖霊観」(東京都立大学社会人類学会『社会人類学年報』7) pp. 161-173
- 三尾裕子 1999 「序—「中華」における文化の多中心性—」(三尾裕子・本田洋編『東アジアにおける文化の多中心性』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
- 山路勝彦 1991 「〈無主の野蛮人〉と人類学」(『関西学院大学社会学部紀要』64: 3971)
- 1994 「植民地台湾と〈子ども〉のレトリック—〈無主の野蛮人〉と人類学 2—」(東京都立大学社会人類

学会「社会人類学年報」20)

方敏英編 1986 「阿美語字典」財団法人中華民國聖經公會

Louis Pourrias, Maurice Poinso 1996 *Dictionnaire 'Amis* (unpublished)

(岐阜市立短期大学)

(2001年2月28日 審査終了受理)

Ancestors Invoked by Rituals: The Case of the *Si-kawas-ay* Rituals of the Amis Tribe in Taiwan

HARA Eiko

During the period of Japanese rule over Taiwan, in religious policy on the aborigines, it was emphasized at one time that they were in common with the Japanese in “ancestor worship”. However, at that time, there were few detailed researches on their ancestor worship except a few anthropological researches, in the point how far the ancestors of each tribe definitely meant. This paper aims to clarify the extent of ancestors through the investigation of religious rites of the Amis tribe, one of the aborigines in Taiwan.

In the discussion of kinship of the Amis tribe, the clan system and the maternal system have attracted attention. The main point of discussion is whether the Amis tribe has the maternal system or not. The area where this paper deals with does not show distinct trace of either the clan nor the maternal system, so this area has not been fully researched anthropologically except a short period after the Second World War. In some villages of this area, we can still find the activities of *si-kawas-ay*, the religious functionary, who used to be in common existence in the villages of the Amis tribe, but has been almost extinct now. This paper tries to define the extent of ancestors of the Amis tribe in order to consider on ancestors, from the religious point of view in which not many materials of this area have not been collected. First in this paper, temporal transition of a dead person with a remarkable personality to an ancestor is discussed. Then, the relation between a person who requests a ritual and an ancestor invoked by the ritual is clarified. Recently among the Amis tribe families, more and more Chinese style altars and mortuary tablets have been set up, so the reception of Chinese family memorial tablets and the relation of the Amis tribe ancestors attract attention. This paper tries to be a basis for developing the kinship discussion of the Amis tribe with the presentation of the materials on the Amis tribe ancestors through the above discussion.

key words: the Ami tribe, *si-kawas-ay*, *kadavo'*, *loma'*
